

災害復興とフィールドワーク ——ネパール・パタンの事例から——

桃山学院大学 大野哲也

1 目的

大規模災害が頻発している現代世界において、そこからの復興をいかに成し遂げていくかが、国家と被災地域の喫緊の課題となっている。しかもそれは、世界各地から瞬時に国際機関のレスキュー隊や災害ボランティアが駆けつけ、長期間にわたって当該地域とかかわることが「常識化」している現代では、もはや国家や被災地域だけの問題や枠組みを超えて、グローバルな視点から取り組まなければならないテーマになった。

一方、社会学や文化人類学などのアリーナでは、調査を「する側」と「される側」の関係性についての議論が長いあいだ続いている。とくに、いわゆる「ライティング・カルチャー・ショック」以降、フィールドワーカーの「権力性」「表象性」「代表性」などの指摘に対して、フィールドワーカーは、いまだに有効な反論ができないでいる。そして、それらの問題を「棚上げ」したまま、今日も、フィールドワーカーは個々の信念や考えに基づき、現地調査をおこなっている。

本発表の目的は、このような状況を鑑み、2015年に起こったネパール大地震を事例にしながら、フィールドワーカーがいかに災害復興と関わることができるのかを考察することにある。それによって、災害復興とフィールドワークの関係性と可能性について考察・展望してみたい。

2 方法

発表者は2004年からネパールにおいて、主にツーリズムの調査をおこなってきた。

2015年4月におこったネパール大地震の際には、所属大学からの命を受けて、6月にテント、寝袋、簡易浄水器、毛布などの援助物資を現地コミュニティに届けた。と同時に、カトマンズ盆地の7か所の世界遺産をまわり被災状況を映像に記録し、大学に戻り、報告をおこなった。

それ以降、当該コミュニティを定期的に訪れて、災害復興に関する調査をおこなっている。

3 結果

発表者が届けた援助物資が契機となって、他のフィールドワーカーだけでなく、多様なヒトやモノが結びつきながら、新たな社会関係が、現地コミュニティという枠組みを超えてグローバルな規模で、日々、創造されている。こうした社会関係は、精神的、身体的、経済的な復興への一助になっていると思われる。

4 結論

個人の内奥から湧き出るようなヒューマニズムでもなく、啓蒙主義的な普遍主義でもなく、徹底した文化相対主義でもない「現地とのかかわり方」を模索し続けていかななければならない。その際には、自己の研究者としての欲望を率直に認めたいうえで、禁欲的に、価値自由な態度の維持を目指さなければならない。そのような試行錯誤のフィールドワークと生の実践の先に、現地社会と現地の人びととの新たな関係性を創造する鍵がある。

謝辞: 本発表は、科学研究費の助成（研究課題/領域番号 16K02087）を受けておこなった研究の成果の一部である。